

ワールドカップ観戦記

下平 眞理

日本のワールドカップ初戦、オランダ戦が行われるダラスのスタジアムは最先端の空調システムで、全米屈指のハイテクノロジーを駆使した超近代的なスタジアムだった。

若者の海外離れが言われる中、スポーツで一流を目指す若者が世界レベルで戦いたいと海外のクラブに所属し、技を磨いている。ある解説者が海外で活躍する選手が百人になったら、日本もワールドカップで優勝を目指せる、と言っていたがいつの間にか海外で評価を受ける選手が増え、応援する楽しみが増してきている。日本は組織で戦うとはよく言われることだが、組織や戦術だけで戦うのには限界があり、後は個々のレベルを上げないとチームとしてのレベルアップは望めない。サッカーは組織の決め事があるスポーツだが一流選手の圧倒的な個の力を見せつけられる度にやはり最後は個人の力が必要とを感じる。ワールドカップは個人のレベルを上げるための大きなモチベーションとなっている。国を背負ってプレーする事は、とてつもない名誉であり、プレッシャーであることは、日本に限らずメンバー発表の際、あのクリスチャン・ロナウドやネイマールでさえメンバーに選ばれて涙していたことが印象的だった。

グリーンのピッチにオランダと日本、両国の大きな国旗が広げられ選手入場、スタジアムが揺れる程の歓声、身震いをしているのは選手だけではない。試合は予想通りオランダに攻め込まれる時間帯が多く、統計ではボール保持率は六、四となっていたが圧倒的に押し込まれている。負けなければ、勝ち点一をもらえれば、と応援している誰かが思っている。

試合は願い通りドローとなり勝ち点一をもぎ取った。だが負けなければよいのは予選リーグでの事、初戦でつまずかなかったこと、先制点を与えたけれども二度にわたって追い付いたこと、サポーターにとっても良い結果だった。試合終了直前までの激しい攻防と七万人の観客の熱気で興奮はなかなか冷めなかった。

ダラスの日暮れは遅かった。